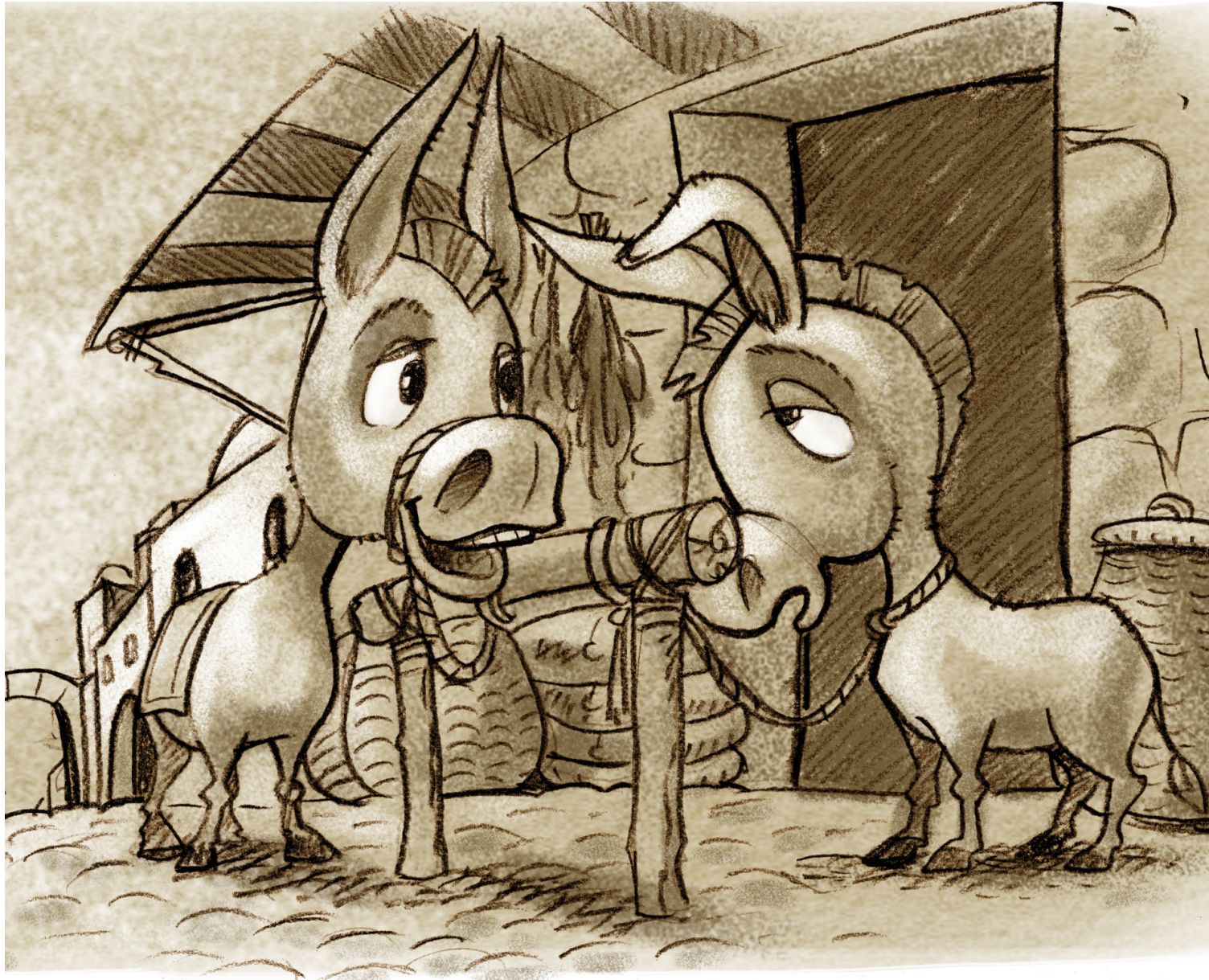


はなし ロバの話



ぼくの主人は店先にぼくをつなぐと、必要な物をかうために、中に入ってしまった。そばには、もう1頭のロバがつながれていた。彼はうとうとしているようだ。

「やあ、こんにちわ。」 ぼくは声をかけた。

そのロバは片目を開けて言った。「ああ、君のご主人も、旅の必需品を買っているんだね。」

ぼくの主人が何のために店の中に入ってしまったかなんて、ぼくには知る由もない。だから、ぼくはそう言った。

「いや、そうじゃないかなと思っただけさ。」 彼は眠そうに言った。「だって、町の大半がぼくの主人の店に立ち寄ったみたいだから、きっと残りの人たちもすぐに来るだろうと思ったんだ。」

「どうしてそんなこと、わかるんだい？」

「町中の人たちが、税金を支払うために自分の故郷の町へ行かなければならないって話しているからだよ。ぼくの主人は、旅の必需品が売れて、商売が繁盛しているんだ。」 彼はそう答えた。

カポツ、カポツ！ カポツ、カポツ！ 石地をかけるひづめの音で、ぼくの耳がピンと立った。見回りのローマ兵が近づいてくる。店のロバは目を閉じて、その音を無視した。だがぼくは、耳をピンと立てて、辺りの様子をじっとうかがった。そう言えば、われわれの土地をローマの支配から解放してくれる偉大な王が来られる、と男の人たちが言うのを、何度も耳にしたなあ。この王は、堂々とした見事な軍馬に乗り、兵隊を従えてやってくるそうなの。

ぼくは、兵隊を 乗せることを 夢見ていた。だけど、飼葉おけに 入った 水に 映る、耳の 長い 自分の 姿を 一目 見ただけで、自分は ただの いやしい ロバに すぎないと 気づく。もし
この 偉大な 王の 行進に 加われると するなら、ぼくは 列の 一番 最後の、荷物を たくさん 積んだ 重い 荷馬車を 引くこと に なるだろう。

「その 馬たちは、どこから 来るんだろう？」と、ぼくは つばやいた。「その 馬たちは みんな、兵隊を 乗せて ローマから やって来たんだと 思うかい？」

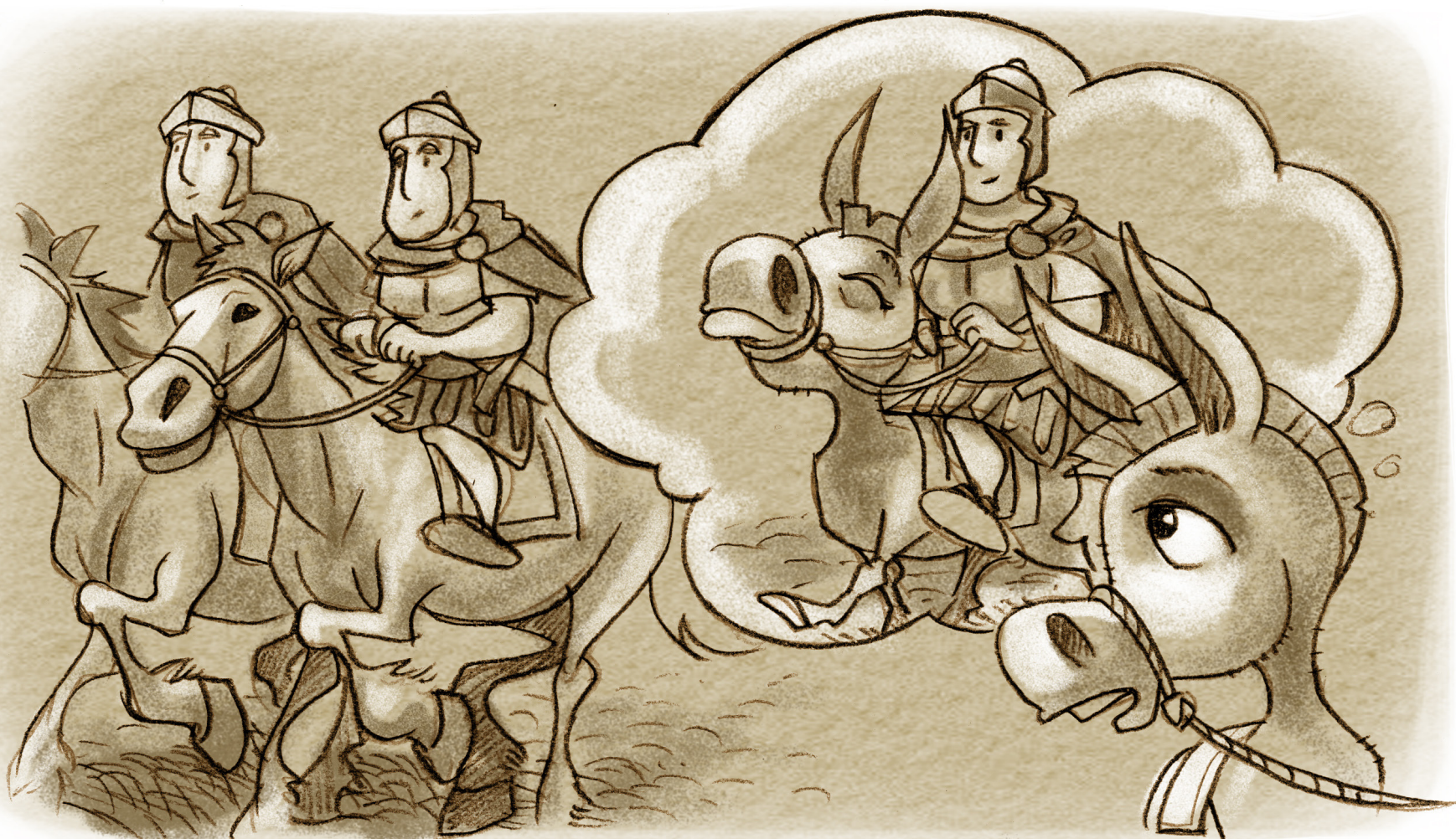
「おそらくね。」 店の ロバは、ぼそっと 答えた。

「ローマかあ！ すごい 冒険だろうなあ！ ぼくは、ナザレを 出たことさえ ないんだ。ぼくの することと いったら、荷物を 運んだり、主人が 作る 木製品を たくさん 積んだ 古い 荷車を
引くことだけだものね。」

「だけど、もし 君の ご主人が 税金を 払うために どこかに 行かなくちゃ いけないなら、今度は 多少 旅が できると 思うよ。」

次の 日の 朝早く、ぼくの 主人は 馬屋に 来て、ぼくの 背中に 毛布を かけ、奥さんの 待つ 家の 前に 連れて行った。彼女は やさしく ぼくの 頭を なでた。「ロバさん、ありがとう。」

主人と 奥さんは、いつも ぼくに 親切だった。だけど、今 彼女は、何の お礼を 言っているんだろう？



主人は 奥さんを ぼくの 背中に 上げると、ぼくの 両側に いくつか 袋を 下げた。そして ぼくの 手綱を 取って、歩き始めた。彼女は 身重で 出産間近だったけど、彼女と 彼らの 荷物を 合わせても、ふだん ぼくが 運んでいる 材木の 荷に 比べれば、軽いもんだった。

町の 壁を 通り過ぎたころ、ぼくは、今までに 行ったことの ない 遠くに 行くんだと 気づいた。ぼくは 最高の 気分だった。

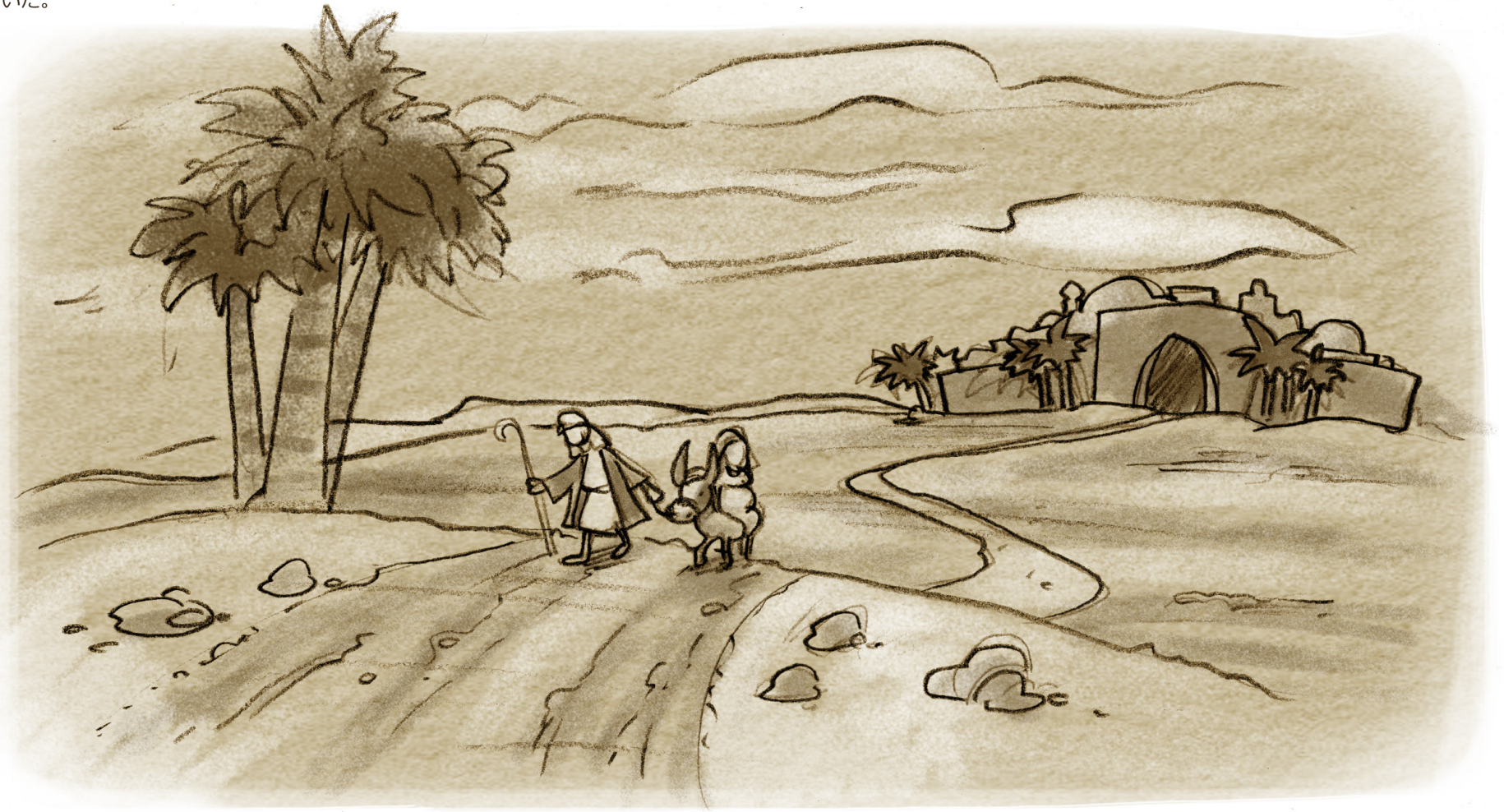
ぼくたちの 目的地である ベツレヘムへは、数日も かかった。ぼくたちは 長旅で つかれ切っていて、主人は とまるところを 見つけようとしていた。ぼくは たっぴりと 食べて、ゆっくりと 休めるのを 待ち望んでいた。だけど、物事は そう うまくは 行かなかった。

「すまないが、部屋は ないよ。」 宿屋の 主人は そう 言って、とびらを 閉めた。

「できる ことは 何も ないね。うちの 宿は 満員なんだ。」 もう 1軒の 宿屋の 主人も、ぼくの 主人に とまれる 場所はないかと 聞かれて、そう 答えた。

「ほかを 当たっては どうだい。ここには 空き部屋なんか ないからね。」

「無理だね。もう すでに とまり客が い過ぎるくらいなのが、見えんのかい？」 なかには、とても 無礼な 宿屋の 主人も いて、ぼくたちの 面前で とびらを バタンと 閉めたり、失せろと なる 人も いた。





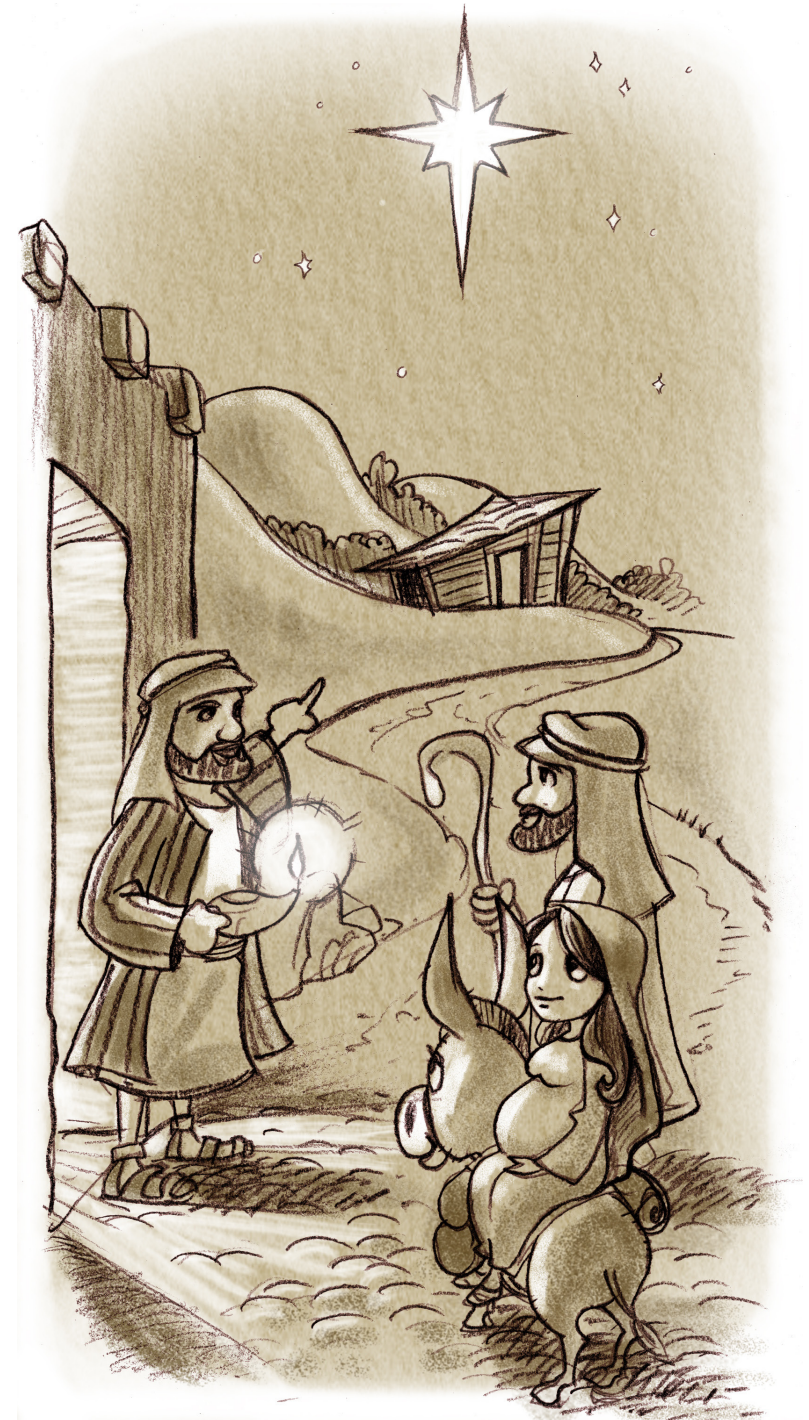
とうとう、ある^{やどや}宿屋の^{しゅじん}主人が、^{しゅじん}ぼくの^{おく}奥さんを^み見て、^き気の^{どく}毒に^{おも}思った。「あ〜・・・う〜ん。
そうだなあ・・・。とまれそうな^{ばしょ}場所があるかも。」その^{おとこ}男の^{ひと}人は^い言った。「^{へや}部屋ではないのだが・・・。
^{あんない}案内しましょう。」そう^い言うと、^{かれ}彼は^{やどや}ぼくたちを、^{うら}宿屋の^{うまや}裏のほうにある、^{あんない}馬屋に案内した。

ぼくは^{ばしょ}ロバだから、そういう^{かま}場所で^{けっきょく}構わない。結局のところ、^{しゅじん}主人と^{おく}奥さんが^{やど}宿の^{へや}部屋にとまったと
しても、ぼくは^{うまや}馬屋にとまるわけだからね。だけど、^{かれ}彼らが^{うまや}馬屋にとまるなんて、^{かんが}考えたこともなかったよ！

そのころまでには、^{ふたり}二人は^きつかれ切っていたので、とまれるものなら、^{かま}そこでも^{こた}構わないと答えた。
「^{しんせつ}ご親切にありがとうございます。」^{しゅじん}ぼくの主人は、^{やどや}おどろいている宿屋の^{しゅじん}主人に^{れい}礼を^い言った。「^{うまや}馬屋でも、
^{かま}いっこうに^{ねむ}構いません。」

^{やどや}宿屋の^{おかみさん}おかみさんは、^{しゅじん}ぼくたちが^{ばしょ}とまれるように^{ととの}場所を整えてくれた。「さあ、おあがり。」そう^い言うと、
^{まえ}ぼくの^{やま}前にも^つわらをひと山^た積んでくれた。だけど、ぼくはほとんど^た食べなかった。あまりにも^{つかれて}つかれていて、
^{ねむ}すぐに^{ねむ}眠ってしまったんだ。

^う生まれたばかりの^{あか}赤んぼうの^な泣き声と^{ごえ}物音で、ぼくは^め目を^さ覚ました。^{うまや}馬屋は、^{ひと}人でいっぱいだった。
^{やどや}宿屋の^{しゅじん}主人と^{おかみさん}おかみさん、それに^{ひつじ}羊飼いたちと、その^{ひつじ}羊までいた。



「一体何が起きているんだろう？」 ぼくは、ぼうっとしながらつぶやいた。「なんで、この人たちがここににいるんだ？ 彼らも宿屋に場所がなくて、馬屋にきたのかな？」

「いいえ。」 め牛が答えた。「この羊飼いたちは、村のすぐ外の丘で、天使が空に現れるのを見たの！」

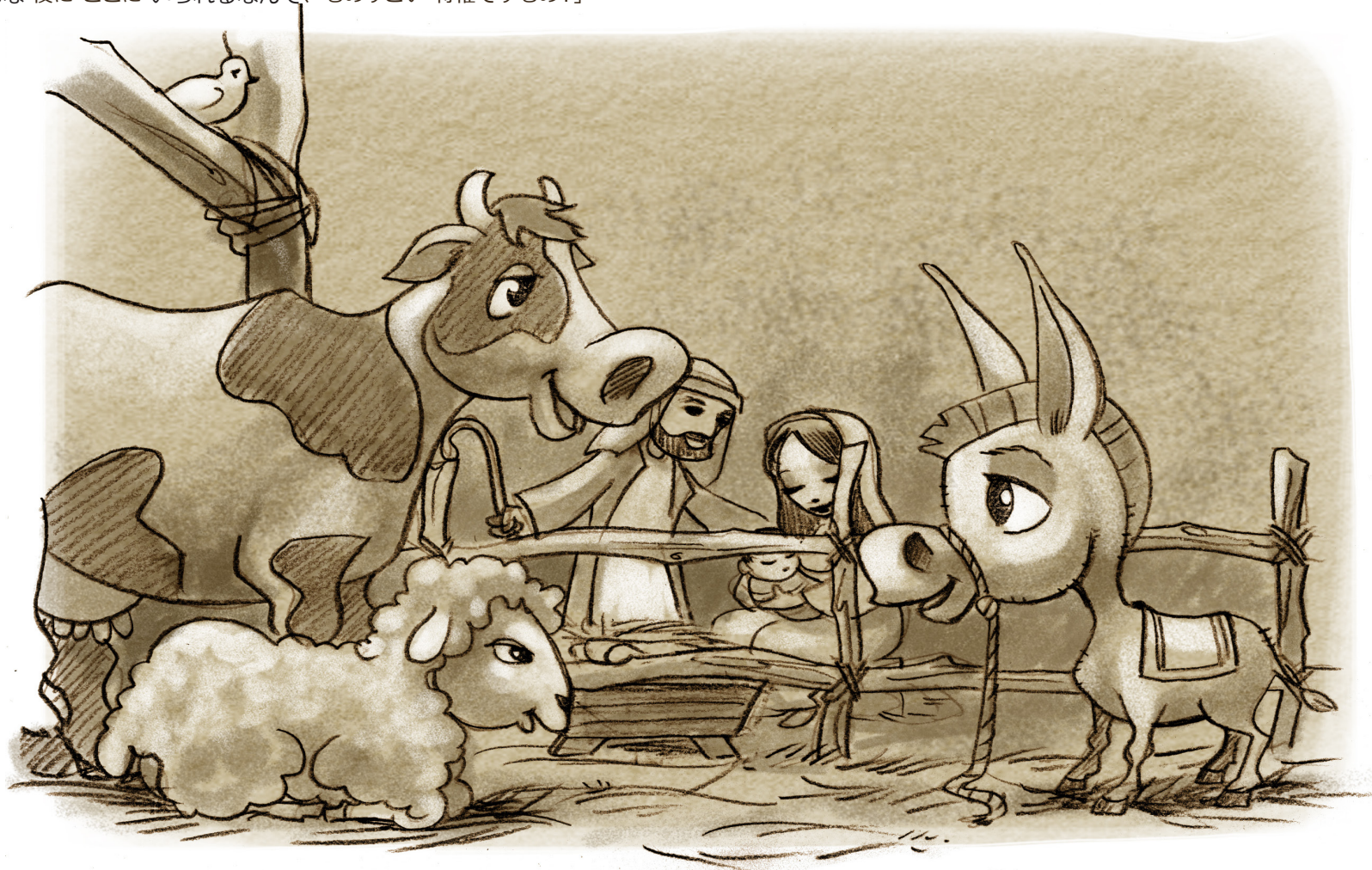
そばにいる子羊も、メーメーと鳴いて言った。「とてもきれいだったよ。天使が空いっぱいにいたんだ。」

お母さん羊も付け加えた。「みんな、歌いながら神を賛美していたわ。その天使が、赤ちゃんのいる場所を教えてくれたの。その子が救い主、主キリストで、わたしたちは、それを知る最初の者として選ばれたんですって！」

「救い主がわたしたちの馬屋で生まれたなんて、とても光栄だわ。」 め牛が言った。そこに住んでいるほかの動物たちも、みなうなずいた。

「赤ちゃん、何てかわいいのかしら！」 垂木にとまっているハトも、下を見下ろしながらクークーと鳴いた。

「宿屋のおかみさんも、お母さんのお手伝いをしてくれたのよ。」 め牛が話の一部始終を説明し続けた。「おかみさんは羊飼いたちの話を聞くと、すぐにご主人を呼びに行ったの。こんな夜にここにいられるなんて、ものすごい特権ですもの！」



まわりを見渡し、みんなの話を聞いていて、
ぼくは、自分もものすごい名誉を与えられていた
ことに気がついた。ぼくは、はるばるナザレから、
その赤ちゃんとお母さんを乗せてきたんだもの！
ぼくみたいないやしいロバが、偉大な王、
救い主を乗せてきたなんてね！

ぼくは長い年月の間、ヨセフとマリヤと
その子イエスを、幸せな気持ちで運んだ。

ぼくはただのロバで、何の取り柄もなかったけど、
実際は、ローマからはるばるやってくるような
最高に立派な馬よりも、ずっと重大で大切な、
二つとないすばらしい運命を担っていたんだ。

こちらは、
ぼくの友達だよ。

この33年後に、
彼はイエス様を
エルサレムに連れて行っただ。
偉大な王としてほまれを
受けるためにね！